Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling 著　深谷太清他訳

『〈新装版〉シェリング著作集 第２巻 超越論的観念論の体系』（文屋秋栄、2022 年）

おやさと研究所主任
堀内　みどり　*Midori Horiuchi*

本書は、『〈新装版〉シェリング著作集』に収められた初期シェリングの大著の新訳である。『超越論的観念論の体系』は 1800 年に著され、1930 年には赤松元通氏によって翻訳出版され、その後、1949 年に再版された。『〈新装版〉シェリング著作集』を刊行した文屋秋栄によると、本著作集の特色は、シェリングの主要著作・論文を読み易く明快に翻訳したこと、研究水準の高い解説・注釈を加えたこと、３種の注記（原注、校訂注、訳注）をそれぞれ、本文中該当ページ脇（傍注）、巻末（尾注）に配置し、明確に区別したこと、原典（初版本と息子版）のページ数を欄外に付したことであるとしている。全６巻全 12 冊の構成は、以下の通りで、このうち、1a, 4a, 4b, 6a, 6b, 6c 巻はすでに出版されており、第２巻は、７冊目ということになる。

1a 巻　自我哲学／高山 守 編
1b 巻　自然哲学／松山壽一 編
２巻　超越論的観念論の体系／久保陽一・小田部胤久 編（全訳）
3a 巻　同一哲学／伊坂青司・加藤紫苑 編
3b 巻　芸術哲学／小田部胤久・八幡さくら・平井涼 編（全訳化予定）
4a 巻　自由の哲学／藤田正勝 編
4b 巻　歴史の哲学／藤田正勝・山口和子 編
5a 巻　神話の哲学〈上〉／大橋良介 編
5b 巻　神話の哲学〈下〉／大橋良介 編
6a 巻　啓示の哲学〈上〉／諸岡道比古 編（全訳）
6b 巻　啓示の哲学〈中〉／諸岡道比古 編（全訳）
6c 巻　啓示の哲学〈下〉／諸岡道比古 編（全訳）

監修には西川富雄、渡邊二郎、神林恒道、相良憲一、田丸徳善の各氏が就き、編集幹事を松山壽一氏、高山守氏が担当している。文屋秋栄は編者の言葉として本著作集について次のように紹介している。

「そもそもなぜ何かがあるのか、なぜ何も無いのではないのか。」（『啓示の哲学』）

晩年、シェリングはこのように問うた。これは、今なおわれわれにとっても、究極の問いにほかならない。シェリングは 18 世紀後半から 19 世紀前半にかけての大思想運動であったドイツ観念論哲学の立役者にしてドイツ自然哲学の領導者、またドイツロマン派の文学や美学にも棹さした多彩な思想家であったばかりでなく、自由と歴史、神話と啓示の問題を究極まで問い詰めた思索家でもあったが、その全貌がこの度の〈新装版〉シェリング著作集の刊行によってようやく明るみに出ることになった。

本著作集はシェリングの全生涯にわたる膨大な著作、遺稿の中から主要著作を厳選し、それらを信頼のおける翻訳によって読めるようにした本邦初の画期的な企てである。これによって、一般の読者は多彩かつ深遠な思想世界に誘われることであろうし、またドイツバイエルン科学アカデミー・シェリング全集刊行委員会の全面協力による初版テクストからの翻訳が可能となったことによって、シェリング哲学研究者や神学、宗教研究者のみならず、ロマン派文学や美学の研究者たちに対しても、地に足のついた思想史研究への道が開かれることになるであろう。

深谷太清、前田義郎、竹花洋佑、守津隆、植野公稔の５名が翻訳した第２巻の編集には久保陽一（序言）と小田部胤久（第５章・第６章）の両氏があたり、本書の解説も担当している。その解説によると、若きシェリングの主著にして、フィヒテの『全知識学の基礎』とヘーゲルの『精神現象学』とを媒介する、ドイツ観念論の最重要著作であり、著者シェリングは「主観的なものを第一のもの、絶対的なものとみなし、そこから出発して、客観的なものを生ぜしめる」こと、換言すれば「特定の外界の物の存在」を「客観の現実的構成によって」もたらすことをめざした、という。「自然哲学」を 体系的に補完する著作として知られ、翌年この体系と「自然哲学」とを統合した「同一哲学」を『わが哲学体系の叙述』において発表したとされる。『世界大百科事典』は、「《超越論的観念論の体系》（1801）は，観念と実在、実践と理論の総合を、人間精神の歩みが芸術に達する地点で果たそうとする。イェーナ期の後半では、《わが哲学体系の叙述》（1801）、《ブルーノ》（1802）等で、主客の根源的同一性を原理する〈同一哲学 Identitätsphilosophie〉を打ち出し、ヘーゲルに強い影響を与える。〈自我がすべてである〉というフィヒテ主義に代わって〈すべてが自我である〉と主張される。」と解説し、本書がシェリング初期哲学の集大成であると理解される。

2006 年より天理大学で教えている深谷太清氏は、本書の緒論・第１章・第２章の翻訳を担当し、氏がミュンヘン大学に提出した博士論文『Anschauung des Absoluten in Schellings früher Philosophie(1794-1800)』（シェリング初期哲学における絶対者観）は後に出版されている。

本書は、テキストに、1800 年に公刊された初版本を用い、1816 年の第２版及び 1858 年の息子編全集の同書の異同等について、校訂注で明示している。訳者の弛まぬ研究の成果は、本文から見出しと思われる箇所を抜き出し読者の理解の助けとなる内容を補って目次としたことや、原注・校訂注・訳注が充実していることなどにあらわれているように思う。目次は以下の通り。

序言
第１章　超越論的観念論の原理について
第２章　超越論的観念論の一般的な演繹
第３章　超越論的観念論の諸根本命題に従った理論哲学の体系
第４章　超越論的観念論の諸根本命題に従った実践哲学の体系
第５章　超越論的観念論の諸根本命題に従った目的論の主要命題
第６章　哲学の普遍的道具の演繹、ないし超越論的観念論の諸根本命題に従った芸術の哲学の主要命題
全体系への総注